



NPO 法人 パノラマ

WAM2021 事業報告書

私たち NPO 法人パノラマは、
「すべての人々がフレームインできる社会を創る」をミッションに、
既存の社会フレーム（枠組み）では収まりきれずに、
社会的弱者となるリスクの高い子どもや若者たちなど、
すべての人々がパノラマ写真のようにフレーム・インでき、
生きいきと暮らせる社会を創るために活動しています。



A man wearing a straw hat and glasses is pouring coffee from a thermal carafe into a cup. He is in a cafe-like setting with a window in the background. The entire image has a yellow tint.

CONTENTS

- 2・令和3年度社会福祉振興助成事業で目指そうとした初期衝動について
- 3・パノラマのこれまでのあゆみ
- 4・校内居場所カフェ事業
- 6・個別相談事業
- 8・高校入学前プロジェクト
- 10・プチ家出支援検討委員会／中退生・卒業生支援
- 12・バイターン事業
- 14・パノラマはどこに行こうとしているのか

令和3年度社会福祉振興助成事業で 目指そうとした初期衝動について

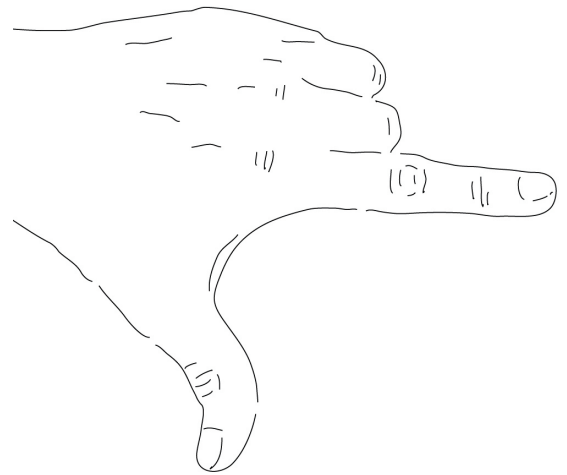
貧困世帯の子どもたちの多くは、経済的理由により高校が最後の教育機会となります。その『最後の砦』である高校で、私たちは2015年から居場所カフェと相談を軸に、中退や進路未決定、早期離職者への支援に（法人化以前を含むと12年間）取り組んできました。

私たちは「出会った責任を果たす」ことをポリシーとし、生徒にとって初めて信頼ができ、行動の伴う大人になることを自分たちに課して活動しています。しかし、制度の枠からはみ出し、その制度の枠に入ることを拒むハイティーンの若者たちを支援することは、極めて難しく、善意頼みの綱渡りのような、「誰かが手を離したらもうおしまい」という緊張感のある支援となります。

このような状況に私たちが立ち会っているのは、高校をフィールドに活動させてもらい、校内居場所カフェでの信頼貯金があるからですが、立ち会っているだけで、ただ呆然と、打つ手がなく立ち尽くしてしまうような場面があります。このような時の無力な絶望は、支援者として味わいたくないものです。ハイティーンの若者たちからしてみれば、「やっぱり（また）ダメだったか」です。そんな諦めが、沈黙からひしひしと伝わってきます。

私たちが、彼ら彼女らのために「出会った責任を果たす」を貫くために、もっと打つ手が欲しい、もっと社会資源に熟知し、地域と血の通うネットワークを持ち、ない制度を創っていかなければ、あの絶望をまた味わうことになり、味合わせることになります。少し抽象的になってしまいましたが、本事業に懸ける初期衝動と歩みを本報告書から感じとっていただけると幸いです。

すべての人をフレームイン！



パノラマのこれまでのあゆみ

2011年6月

現・理事長石井正宏が田奈高等学校に、内閣府モデル事業「よこはまパーソナル・サポートサービス」から相談員として派遣され、図書館での交流相談を提案し、現・理事で学校司書の松田ユリ子が快諾。

2012年

1月神奈川県「新しい公共事業」に採択され有給職業体験バイターン開始。

2014年12月

ローカル・クラウドファンディング「LOCALGOOD YOKOHAMA」を活用しNPO法人パノラマとして100万円の寄付を集め、高校内居場所カフェ「びっくりカフェ」を田奈高等学校で開始。

2015年3月12日

特定非営利活動法人パノラマ設立認定（理事3名、監事1名）

2016年4月

「校内居場所カフェ等予防支援に於ける成果指標の作成及び在り方検討委員会（通称：成果指標委員会）」立ち上げ（～2019年3月）

2016年6月

「支援をしない支援」を目指したサードプレイス提供事業居場所居酒屋「汽水」オープン。

2017年6月

神奈川県立大和東高等学校 BORDER CAFÉ 開始

2017年7月

「ボランティア養成講座」開始。一般の市民の方を対象とした養成講座を開始。これまでに、延べ165名が受講（2020年8月現在）

2018年12月

「フレームイン基金」を立ち上げ、中退後・卒業後の伴走支援開始

2019年2月8日

2018年度パナソニック教育財団「子どもたちの“こころを育む活動”」全国大賞受賞

2019年3月

校内居場所カフェ事業において「入学前支援」をトライアルスタート2019年4月1日よこはま北部ユースプラザ受託・運営開始。高校を中退した若者や卒業後の生徒の進路支援も含め、他の事業とも連携が進んでおり、横浜北部エリアで徐々に切れ目のない支援モデルの構築を目指す。

2019年8月1日

『学校に居場所カフェをつくらう！～生きづらさを抱える高校生への寄り添い型支援～』を明石書店より発刊

2021年8月

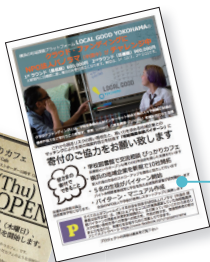
40歳以上の孤立しがちな方向けオンライン会話サービス「ブリッジ (BRIDGE)」事業開始。

2022年1月

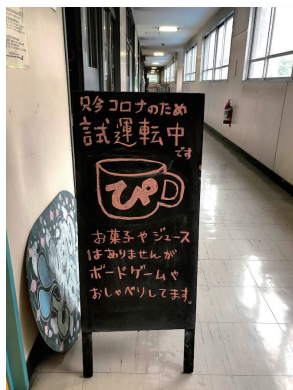
青葉区寄り添い型生活支援事業を受託し、養育が困難なご家庭の小中学生の放課後の居場所「.5てんご」をスタート。

2022年3月

かながわボランティア活動推進基金 21 ボランティア活動奨励賞を受賞。



当たり前の中の日常の中にある価値と 校内居場所カフェの意義



コロナ禍によって変化する現場

長引くコロナにより、世の中は自粛モードが当たり前の日常になっています。コロナの蔓延状況により、やれるか、やれないかがわからないイベントは、「やる」を選択して厄介な状況判断を強いられるより、「やらない」を選択する方がベターであると社会全体が学習してしまったようです。

そのような思考にモヤがかかるような状態の中、オリンピックが良くて運動会がダメということに象徴されるように、学校の中では、生徒たちに「ダメ」の説明がつかないダブル・スタンダードが蔓延しているように思います。しかし、生徒たちも自粛モードに犯されてか、驚くほど大人たちの決定に従順です。

しないため、随分と参加生徒数が減ってしまったことです。

しかし、このような状況だからこそ気づけたことが2つあります。カフェを実施する2校で大きくカフェの対応が違っていました。一方では開催や飲食の提供を中止するという対応が取られたが、もう一方では通常営業が大半で可能だった。県や教育委員会はガイドラインを示すものの、その決定は校長に委ねられています。若年者であれば、中退や進路未決定になることのリスクが人生に及ぼす影響は大きいと考えられます。これは、福祉的な視点を持つ生徒ファーストな教員が増え、管理職になることで、学校が変われる可能性を示唆している、これが1つ目の点です。

そして2つ目は、飲食なしカフェ（これをカフェと呼んでいいのかわらぬ）での気づきです。カフェには胃袋を満たしたい生徒と、心を満たしたい生徒の2タイプが存在していると感じていましたが、見事に胃袋を満たしたい生徒たちが姿を消してしまいました。また、心を満たしたい生徒たちは飲食がなくてもカフェに集まって来ていました。やはり、学校の中に親でも先生でもない第3の大人たちへの生徒ニーズがしっかりあることが確認されました。この捕捉数を上げるために飲食があり、幅の広いソーシャルワークを可能にしていることが裏付けられたと言えるでしょう。

このように、当たり前が奪われたことで気づく、当たり前の日常というも

DATA

ぴっかりカフェ @ 田奈高校

●開催回数 **14回**

※4月、9月、1～3月が中止。

●来店生徒数 **約280名**

※飲食なしのため、カウントせず1回約20名の参加として計算。

●ボランティアさん **延べ60名**

BORDERCAFÉ @大和東高校

●開催回数 **28回**

●来店生徒数 **約839名**

●ボランティアさん **延べ68名**

「対面」をめぐる対応の 違う2校のケース

この自粛モードの中に、校内居場所カフェもすっかり飲み込まれてしまい、思うように事業を進めることができず、今年も苦戦することになりました。本来、校内居場所カフェは、支援者と被支援者（生徒）が学校の中でフェイス・トゥ・フェイスの関係になるために、支援機関からアウトリーチしてはじまったものです。その生徒と顔を合わせるアタッチメントを、私たちはこの2年間ですっかり失ってしまいました。具体的には生徒と保護者を対象とした合格者説明会と入学式、オリエンテーションができなくなっていること、そして生徒たちは、顔を知らない大人のいる場（カフェ）に行こうとは



のの中にある価値に気付かされること
が多い年でした。

ビッグ・イベントが 教えてくれたもの

極め付けは、飲食なし、フード・パ
ントリーありのクリスマス・パー
ティーです。飲食なしでも多くの生徒
たちが集まり、ライブ演奏やビンゴ
大会で大いに盛り上がりました。考え
てみれば、3年生たちはビッグ・イベ
ントを経験することなく卒業していく
“思い出を持たない”生徒たちです。
ここぞとばかりに、ポスターを描くと
立候補してくれた生徒や、震える手で
マイクを握った内向的な生徒、先生た
ちにコラボレーションを持ちかけ、歌
の途中で先生たちが乱入してダンス
を披露するという演出をした生徒、さ
まざまな趣向を凝らした出し物でパー
ティーを盛り上げてくれました。

校内居場所カフェは思い出づくりの

場でもあり、やりようによっては一生も
の思い出だった作れる。そんなこと
を生徒たちがカフェのポテンシャルと
して見出していたことに、コロナ禍で
あることを忘れるほど大人たちも楽し
みました。人前ではじめてギターを弾き
切った生徒のやり切った興奮と達成感
に満たされた表情を見ていると、文化
資本のシェアによる、文化のフックが社
会関係資本に引っかかるという当法人
の考えを、生徒たちが本能的に求めて
いるという証明のようにも思えました。

また、苦肉の策として実施したフー
ドパントリーも、用意しておいた50
人分の袋があつという間になくなって
しまいました。食べ物を渡しながら交
わされる会話は、ジュースをコップに
注いであげるそれとは違い、より生活
感のある話題であり、生徒の暮らしぶ
りが窺える内容でした。今後も継続的
に実施すべきコンテンツであることが
肌で感じられました。

ウィズ・コロナの時代に 得られたヒント

コロナという苦渋をなめながら、生
徒たちとのアタッチメントを奪われた
私たちだったが、だからこそ、校内居
場所カフェの新たな可能性に気づくこ
とができたように思います。私たちは、
ビフォー・コロナ時代に培ったノウハ
ウと、そのノウハウや理念の強化に
よる、ハイブリッド型の校内居場所カ
フェを展開することが可能になってい
ると感じています。今後も長引くかも
しれない、ウィズ・コロナの時代にも
対応する校内居場所カフェがあること
は、大きな収穫でもあったと、今はしっ
かりと思えるようになっていきます。

来年度は、目の前のことにコツコツ
と取り組みながら、外的な要因に影響
されず、学校の中にあるため
の制度化に向けて、活動のウィングを広
げていきたいと思えます。

教員や校内専門家との連携で実現したサポートも

個別相談事業 Drop-In（どろっぴん）は、支援機関からの学校へのアウトリーチ事業として始まったのですが、校内居場所カフェ事業がスタートしてからは、このカフェと連動したものとして実施されてきました。そのため、相談に繋がるケースとしては、①（ゆるやかな）継続相談、②校内居場所カフェ（ぴっかりカフェ）での出会いと発見、③担任などからのリファー、④校内専門家からのリファーといったパターンの中でも、②が果たす役割が大きく、これまで学校の中で「発見」されていなかった、生徒の困りごとが「発見」されることが多くありました。個別相談事業 Drop-In の大きな特徴は、

- ・主訴がはっきりしていない相談ができる
- ・顔見知り
- ・信頼関係のできている大人（居場所カフェスタッフ）が担当者である
- ・2名体制である
- ・相談の時間だけでなく、日常的な見守りの場として校内居場所カフェがある
- ・卒業後・中退後にも「帰ってこれる」相談である

という点です。校内居場所カフェでは、早期に生徒の困りごとを発見でき、発見された困りごとを個別相談ではじっくり話しソーシャルワークに繋げることのでき、個別相談でじっくり話をしながらカフェでもゆるやかに様子を見守ることができるものでした。

今年度も新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、多くの生徒が集まりやすい校内居場所カフェがお休みになる時

期もあり、個別相談のみが動いている時期がありました。また、飲食なしのカフェの開催を行っているカフェもありました。

カフェが飲食なしになったことによって、前年度からカフェを居場所としている常連の生徒に関しては、校内居場所カフェでの会話の中から、心配なケースに関しては個別相談で話をし、ソーシャルワークに繋げることができました。

一方で、常連生徒以外のニーズのキャッチをすることが難しく、担任や担当の教員からのリファーで繋がるケースも多くありました。そのため、困りごとを言語化できず、微弱的なSOSという形で発信する生徒へはリーチが十分にできていないと感じることも多くありました。

今年度の相談内容・件数をみても、学校に登校しにくくなる生徒が見えてくる時期の相談や、例年10月～12月頃に増加する進路や進級に関わる相談などについては変わらず多くなっています。一方で、明確でない主訴での相談や先生から見えにくい内容での相談が減少していました。

やはり、こういった点においてゆるやかな居場所である校内居場所カフェがコロナ前のような形で開催することができ、本事業の個別相談と連動していることは重要であるということを感じた1年でした。

一方で、教員や校内専門家との連携が進んだことにより、緊急支援の必要なケースで校内では解決できないものが、当法人に相談に来ることも増えてきており、緊急支援のサポートをしたケースもありました。

DATA

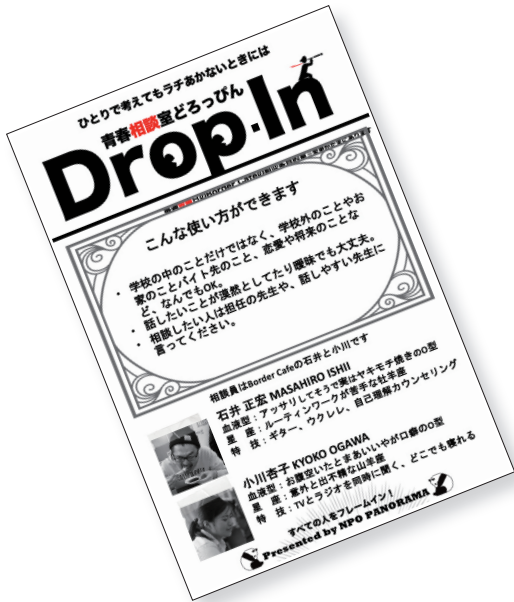
2021 年度実績

●実施回数

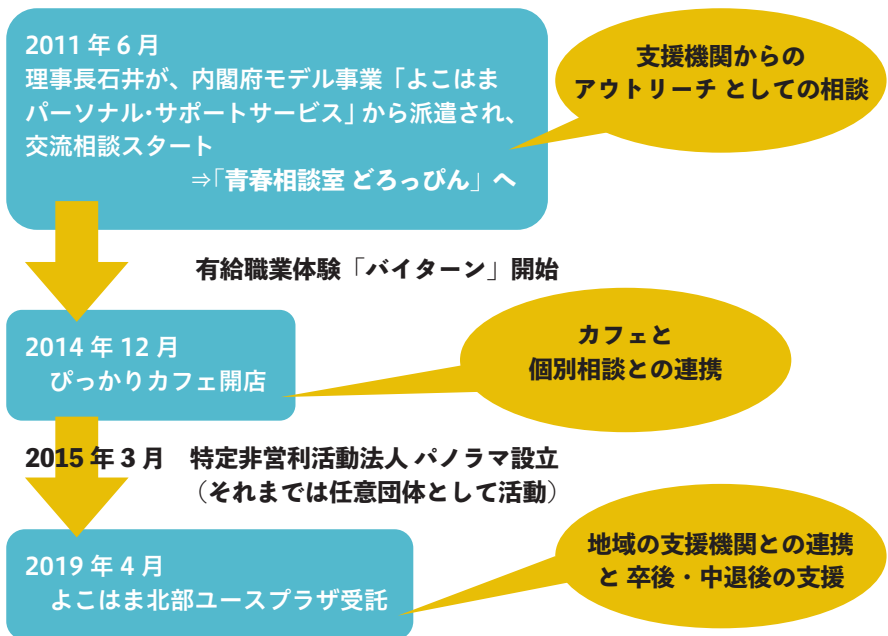
23回

●延べ人数

40名



個別相談事業 Drop In (だろっぴん) のあゆみ

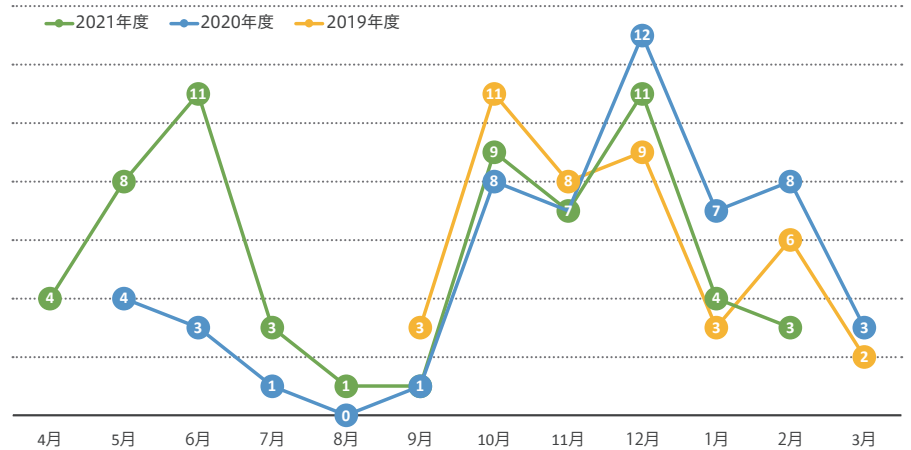


ある日のだろっぴん

～ One Day At Drop-In ～

先生に連れて来られた茶髪女子(初対面)。不貞腐れて椅子に座り、ずっとスマホを弄って目を合わせてくれない。「なんかあった?」とカマをかけると「知らねえよ」と舌打ち。学校関係の質問は全部シカト。しかし「バイト何やってるの?」の質問には「コンビニ」と応える。その後、嫌な客の話で盛り上がり「頑張ってるんだね」と労うと黙って「うん」とうなずいたところでチャイムが鳴る。「よかったらまた話さない?」にも、「うん」と黙ってうなずいた。

出張相談 (だろっぴん) 件数の推移 (～ 2月末)



2021年は5～6月の増加が顕著。例年10～12月に増加しており、本年度も同様。

「高校」への期待と不安。 居場所カフェの存在を伝えるだけでも効果あり

期待と不安に寄り添う存在に

「中学では、あまりクラスに馴染めなかったけど、高校からは部活やバイトも頑張ってる、友だちもできたらいいなと思っています。だけど、また同じように馴染めなかったらどうしよう...」そんな中学3年生の期待と不安が五分五分な気持ちに寄り添うのが、今年度WAM助成事業として実施した、高校入学前支援プロジェクト「ごぶごぶ」です。新型コロナウイルスの感染拡大前には、トライアルとして、合格者説明会の日に入学前カフェ体験を実施していました。トライアル事業の中で、成果として見てきたのが、「入学前」に出会った生徒のカフェへの定着率の高さです。また、合格者説明会の日にカフェ体験を実施することで、保護者の方の相談に発展をすることができるケースもありました。今年度は、この入学前カフェ体験に加え、オンラインと対面のハイブリッドでの「セミ

ナー相談会」を開催し、より生徒たちの不安や期待に早期に寄り添える形を模索しました。しかしながら、新型コロナウイルス対策のために入学前カフェ体験の実施は中止となり、セミナー相談会についても教育委員会や学校との調整に時間がかかってしまったことから、規模を縮小してのトライアル実施のような形となりました。今年度の取り組みの中で、「中高の（支援・情報の）接続」という課題が、重要でありながらも、義務教育と義務教育後の違いや、市立と県立の違いなど、様々な制度のすき間にあることからこれまでリーチできない課題であったということが見えてきました。「ごぶごぶ」はその制度のすき間に橋をかける事業として、生徒の期待と不安に寄り添う1つのあり方としてより良い形での実施に向けて取り組んでいきたいと思えます。



2021 年度実績

セミナー相談会の開催

開催日：

令和4年3月12日（土）

13時～14時半まで

※オンライン相談はこれ以降も続きます。

対象：神奈川県内の高校に進学を予定している中学3年生とその保護者

第1部：神奈川県立高校スクールカウンセラーに聞く『最初の3ヶ月をどうサバイバルする？学校の中の味方との出会い方』講師：美濃屋裕子さん（ソーシャルワーク事務所 SURVIVE 代表）

第2部：オンライン相談会：NPO法人パノラマのスタッフと美濃屋によるオンライン相談

●参加延べ人数

7名
(第1部のみ)

ごぶごぶ



イメージキャラクター「ごぶごぶちゃん」

制度のはざままで手を離さないために

「プチ家出」と称した緊急の社会的養護の必要性

これまでパノラマでは、神奈川県立高校2校で校内居場所カフェを実施しました。その中で、ここ2-3年で課題となっているのが、中退生や卒業生の支援です。相談支援だけでなく、行政への伴走や、支援機関への橋渡し、居宅支援などの緊急支援といった、既存の制度のはざまにおかれた若者の伴走を行ってきました。その中で、大きな課題となったのが、社会的養護に何らかの理由で繋がることのなかった、あるいは繋がったものの本人がこれまでの経験から公的な支援を拒んでいるケースの存在です。

今年度は、これらの中退・卒業後の若者の伴走支援を行いながら、「プチ家出支援検討委員会」を立ち上げ、その社会的養護に繋がっていない若者のはざまの支援のあり方を検討しました。法的な部分でのサポートをいただくために弁護士の方、学校側としての視点からサポートをいただくために元

管理職の方、同様の取り組みをしている他地域の現場の方、を委員として迎え、現状の課題整理やプチ家出支援を実施する上での課題の整理などを行う検討会を開催しました。

本年度個別相談事業で、実際にケースが発生したが、これまでの経験から公的な支援を拒絶する若者を前に合った形の仕組みがなく、泊まり先がないことの危険性を改めて痛感しました。今年度の検討会や他団体の事例の簡易調査を踏まえ、現行制度や新たに出された児童福祉法の改正案などを踏まえた、他団体などとも連携した形での「プチ家出支援」のあり方があるのではないかと見えてきています。

次年度はこのことを踏まえた上で、他団体の類似の取り組みの集約やヒアリング、視察などを通じてより具体的に現実的なあり方を、校内居場所カフェ事業等の制度化とも合わせながら検討していきたいと考えています。

DATA

2021 年度実績

プチ家出支援検討委員会年2回（オンライン）開催

●卒業生・中退生支援

11名



（フレーム・イン基金【中退・既卒の子どもたちのための基金】でやれること）
写真左：バイターンでも連携している中小企業の方の車で寄付いただいた家電を若者の自宅へ
写真右：安心できる居場所探し（居宅支援）とその後の生活の支援も行いました

楽しげに働く大人たちのいる街で、 若者たちとつながってくれる事業者と出会う

DATA

2020 年度

- 参加延べ人数 **66名**
内訳：採用6名、不採用2名辞退3名、保留1名
- 体験延べ回数 **66回**
- 参加者数 **12名**
内訳：採用7名、不採用2名辞退1名、保留2名
- 採用者 **7名**
内訳：就労継続中6名他社採用1名
- 受け入れ企業数 **7社**
- 新規・再発掘企業数 **1社**

2021 年度

- 参加延べ人数 **87名**
内訳：採用6名、不採用2名辞退3名、保留1名
- 体験延べ回数 **91回**
- 参加者数 **12名**
内訳：採用6名、不採用2名辞退3名、保留1名
- 採用者 **6名**
内訳：就労継続中5名、中途退職者1名
- 受け入れ企業数 **6社**
内訳：不動産業、農業、WEB関係、福祉事業所、飲食店、塗装業
- 新規・再発掘企業数 **4社**
内訳：ワールドジャーニー、UAS、サンミラー、でんぱた

自分の番が回ってくる居場所

4年前のこと。極度の緊張感の中で、北部ユースプラザ（北プラと略）を受託するためのプレゼンテーションに挑みました。「私たちは北プラを縁側のような出入りのしやすい居場所にします」と、あの日宣言したのです。そして成熟した居場所とは、誰かが背中を押すのではなく、「次は自分の番だ」と勝手に若者がその役割を引き受け、一步を踏み出すような場であり、踏み出せなさに自然な葛藤を抱いたり、そのことについて語り合えるような場だと思います。私たちはそんな居場所を目指すと、審査員に語り、私たちは北プラの運営団体に採択していただきました。このようなことを実現させる場合、大きく開放された居場所の窓から見える景色がとても大事なんです。そこには楽しげに働く町の大人たちが、お節介するわけでもなく通りかかる。そんな大人たちに可愛がられている先輩メンバー（利用者）がいて、居場所でその経験を誇らしげに語ったり、失敗談で笑い取ったりしている。縁側に腰をかけながら、そんな話を聴きつつ、自分もいつかはそのステージに立つことを想像し、希望に腰が疼いたり、ビビって怖気づいたりしている。私たちが今年度目指したのは、パノラマが地域に根ざし、北プラの窓から見える景色に加わっていただける大人を増やそうということでした。地域の法人会でバイターンについての説明をさせていただく時間を設けていただいたり、ローカル・メディアに取り上げていただいたりしながら、つながりがつ

ながりを生み、多くの若者を受け入れて下さる事業者の皆さまとつながることができました。バイターンというのは、ひきこもりを経験した若者たちにとっては、社会と直結した、とても刺激的なプロジェクトだと思います。

試行錯誤の成果が見え始めた3年目

このようなアプローチが若者を萎縮させるとして嫌う団体もありますし、行政から就労刺激を与えないよう指示が出る場合もあります。私たちはこの3年間、若者が覗こうと思えば覗けるようにしてみたり、もう少しプッシュしてみたり、その匙加減をスタッフたちが語り合いながら試行錯誤をしてきました。その成果が顕れたのが、パノラマが北プラの運営を開始して3年目となった今年度だったと強く感じています。参加のハードルを下げるために体験会を設けて下さる企業がいくつもありました。働くことは決して楽しいことではありません。ですが、その辛さを緩和する喜びや楽しさもあってこと、仕事を長く続けられるんだろうと思います。それを先に経験として知ることは、若者たちにとって働くモチベーションになったと思います。バイターンで働きはじめた若者が、久しぶりに居場所に顔を出したときの、「俺、バイターンやってんだぜ」という、どこか隠しきれない誇らしさは、見ていて可愛らしくもあり、頼もしいものだったりします。



① トマト栽培農園での作業風景 ② 協力レストランでの初顔合わせ。③ 協力申し出のあった焼肉店で法人スタッフの忘年会を実施 ④ 緑法人会さんでバイターンのプレゼン ⑤ 有償ボランティア期間を経て正式採用に ⑥ 塗装と左官の会社を見学訪問 ⑦ 援農を行っていた農園で森ノオトさんの取材を受ける理事長石井。

もっと詳しく知りたい方へ
森ノオトさんに書いて
いただきました。

2021年12月、青葉区でさまざまな市民の活動を取材・紹介している情報サイト「森ノオト」さんに、パノラマのバイターン事業について取材・執筆していただきました。

理事長の石井が抱えている熱い思いや、実際にバイターンの事業に参加している生徒や企業、また実際にバイターン事業によって就職して今を生きている当事者の話も取材していただきました。

ぜひ、アクセスしてお読みください。



<https://morinooto.jp/2021/12/20/byturn/>

A person wearing a white lab coat is pointing at a document on a table. To the right, there is a vintage computer terminal with a keyboard and a screen. The entire image has a yellow overlay.

パノラマはどこへ行こうとしているのか？
～ Where Is The Panorama Going ? ～

“あったらいいな”を“あってよかった”に

40歳以上の方へのオンライン会話サービスの事業名を考えているとき、既存の支援はすべて当事者にとっては崖の向こうにある支援であり、誰もそこに橋を架けようとはしないことに憤りを感じ、「ブリッジ (橋)」という名称にしました。

その昔、ひきこもり支援をしているNPOに勤めていたとき。若者と支援団体を、雨漏りする天井から落ちる雨粒と、それを受けるコップや茶碗のように思え、なぜ、天井に上がって雨漏りの穴を塞ごうとする人がいないのかと憤っていた、あの頃の感情とメタファーは違えど、まるで同じ感情が自分を後押ししていることにふと気がつきました。

支援の“あったらいいな”を、企画会議であぶり出し、カタチにしていくようなことにパノラマは労力を割いていません。日々の活動の中で、“あったらいいな”はどうしても見えてきちゃうものなんです。その見えてしまっている“あったらいいな”に、お金がつかないからやれないという現状を、私たちが出会った子どもや若者たちのために打ち破っていきたい。それが私たちの社会的責任だと思って活動しています。そして、“あってよかった”に救われたクライアントや私たちの感情を言葉にしてシェアしていくことで、“あってよかった”を全国に増やしていくお手伝いをする、それが責任を果たすことであり、すべての人をフレームイン!することに半歩でも近づくことになるんだと信じています。

ですので、パノラマはどこにも行かずココにいます。横浜の北部エリアで、今日も子どもや若者、彼ら彼女らを見守る大人たちといっしょに支援をしつづけます。受益者負担のできない方々への支援は、皆さまのご理解やご協力、応援なくしては成り立ちません。“あったらいいな”を“あってよかった”に変える営みが継続するために、パノラマの活動への応援を何卒よろしく願い申し上げます。

特定非営利団体活動法人パノラマ

理事長 石井正宏

みんなの力をつなぐ!

発行日：2022年5月30日
発行者：特定非営利活動法人パノラマ
〒227-0061 横浜市青葉区桜台 25-1
桜台ビレジ・コリドールR1号室
Mail：npo.panorama@gmail.com
URL：<https://npo-panorama.com/>
デザイン：清水真理

本冊子は、WAM 2021 助成金を受けて作成しました。